萬葉集略解

三上

内閣文庫
類 和書
號 一八二〇八
冊 三二
架 二〇〇函 一八

内閣文庫
番號 和 18208
冊數 32（ 5）
函號 200 141

国立公文書館 National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

日本政府圖書
淺草文庫
（蔵書印）

萬葉集巻第三

雜歌

天皇御遊雷岳之時柿本朝臣人麻呂作歌一首〇天皇賜志斐嫗御歌一首 志斐嫗奉和歌一首〇長忌寸意吉麻呂應詔歌一首〇長皇子遊獵路池之時柿本朝臣人麻呂作歌一首 并短歌 或本反歌一首〇弓削皇子遊吉野之時御歌一首 春日王奉和歌一首 或本歌一首〇長田王被遣筑紫渡水島之時歌二首 石川大夫和歌一首 名闕 〇又長田王作歌一首〇柿本朝臣人麻呂羇旅歌八首〇鴨君足人香具山歌一首 并短歌 或本歌一首〇柿本朝臣人麻呂獻新田部皇子歌一首 并短歌〇刑部垂麻呂従近江国上来時作歌一首

の字の下ふる

○柿本朝臣人麻呂従近江国上来至宇治河邊作歌一首○長忌寸奥麻呂歌一首○柿本朝臣人麻呂歌一首○志貴皇子御歌一首○長屋王故郷歌一首○阿倍女郎屋部坂歌一首○高市連黒人羇旅歌八首○石川少郎歌一首 名曰君子 ○高市連黒人歌一首 黒人妻答歌一首○春日蔵首老歌一首○高市連黒人歌一首○春日蔵首老歌一首○丹比真人笠麻呂往紀伊国超勢能山時作歌一首 春日蔵首老即和歌一首 即ハ郎ノ誤 ○幸志賀之時石上卿作歌一首○穂積朝臣老歌一首○間人宿禰大浦初月歌二首○小田事勢能山歌一首○角麻呂歌四首○田口益人朝臣任上野国司時至駿河国清見埼作歌二首 本文ニハ益人大夫とあり ○弁基歌一首○大納言大伴卿歌一首 未詳 ○長屋王駐馬寧楽山作歌二首○中納言安倍廣庭卿歌一首○柿本朝臣人麻呂下筑紫国時海路作歌二首○高市連黒人近江舊都歌一首○幸伊勢国之時安貴王作歌一首 六本時の字を脱 ○博通法師往紀伊国見三穂石室作歌三首○門部王詠東市中木作歌一首 本文ニハ中木二字と之樹ニ作る ○桜作村主益人従豊前国上京之時作歌一首○式部卿藤原宇合卿被遣改造難波堵之時作歌一首○土理宣令歌一首○波多朝臣少足歌一首○暮春之月幸芳野離宮之時中納言大伴卿奉勅作歌一首并短歌 本文ニハ未逢奏上歌の五字あり ○山部宿禰赤人望不盡山歌一首并短歌○詠不盡山歌一首并短歌○山部宿禰赤人至伊豫温泉作歌一首并短歌○登神岳山部

宿禰赤人作歌一首并短歌○門部王在難波見漁父燭
光作歌一首○或娘子等以裹乾鰒贈通観僧戯請咒願
之時通観作歌一首○太宰少貳小野老朝臣歌一首○
防人司祐大伴四綱歌二首○師大伴卿歌五首○沙彌
満誓詠綿歌一首（イ本歌の字脱）○山上憶良臣罷宴歌一首○
太宰師大伴卿讃酒歌十三首○満誓沙彌歌一首（本文ハ沙弥満）○
（誓とあり）○若湯座王歌一首○釋通観歌一首○日置少老
歌一首○生石村主真人歌一首○上古麻呂歌一首○
山部宿禰赤人歌六首（イ本一首とあり）或本歌一首○笠朝臣金村
塩津山作歌二首○角鹿津乗船之時笠朝臣金村作歌
一首并短歌○石上大夫歌一首○和歌一首○安倍廣
庭卿歌一首○出雲守門部王思京師歌一首○山部宿

禰赤人登春日野作歌一首并短歌○石上乙麻呂朝臣
歌一首○湯原王芳野作歌一首○湯原王宴席歌二首
○山部宿禰赤人詠故太政大臣藤原家之山池歌一首
（歌上作字あるハ誤也 本文ニよりて除く）○大伴坂上郎女祭神歌一首并短歌○
筑紫娘子贈行旅歌一首○登筑波岳丹比真人国人作
歌一首并短歌○山部宿禰赤人歌一首○仙柘枝歌三
首○羈旅歌一首并短歌○譬喩歌○紀皇女御歌一首
○造筑紫観世音寺別當沙彌満誓歌一首○太宰大監
大伴宿禰百代梅歌一首○満誓沙弥月歌一首○金明軍歌
一首○笠女郎贈大伴宿禰家持歌三首○藤原朝臣八
束梅歌二首○大伴宿祢駿河麻呂梅歌一首○大伴坂
上郎女宴親族之日吟歌一首　大伴宿祢駿河麻呂即和歌

一首○大伴宿祢家持贈同坂上家之大嬢歌一首○娘
子報佐伯宿祢赤麻呂贈歌一首　佐伯宿祢赤麻呂更
贈歌一首　娘子復報歌一首○大伴宿祢駿河麻呂娉
同坂上家之二嬢歌一首○大伴宿祢家持贈同坂上家
之大嬢歌一首○大伴宿祢駿河麻呂歌一首○大伴坂
上郎女橘歌一首　和歌一首○市原王歌一首○大綱
公人主宴吟歌一首（綱ハ綱の誤カ）○大伴宿祢家持歌一首

挽歌

上宮聖徳皇子出遊竹原井之時見龍田山死人悲傷御
作歌一首（小墾田宮御宇天皇代）（此九字本文ナシ）○大津皇子被死
之時磐余池陂流涕御作歌一首○河内王葬豊前国鏡
山之時手持女王作歌三首○石田王卒之時丹生王作

歌一首并短歌　同石田王卒之時山前王哀傷作歌一
首　或本反歌二首○柿本朝臣人麻呂見香具山屍悲
慟作歌一首○田口廣麻呂死之時刑部垂麻呂作歌一
首○土形娘子火葬泊瀬山時柿本朝臣人麻呂作歌一
首○溺死出雲娘子火葬吉野時柿本朝臣人麻呂作歌
二首（二ト一ノ誤）○過勝鹿真間娘子墓時山部宿祢赤人作歌
一首并短歌○和銅四年辛亥河邊宮人見姫島松原美
人屍哀慟作歌四首○神亀五年戊辰太宰帥大伴卿思
戀故人歌三首○神亀六年己巳左大臣長屋王賜死之
後倉橋部女王作歌一首○悲傷膳部王歌一首○天平
元年己巳攝津国班田史生丈部龍麻呂自經死之時判
官大伴宿祢三中作歌一首并短歌　○天平二年

庚午冬十二月太宰帥大伴卿向京上道之時作歌五首
帥を師ニ誤ル　○還入故郷家即作歌三首○天平三年辛未秋
七月大納言大伴卿薨之時作歌六首○天平七年乙亥
大伴坂上郎女悲嘆尼理願死去作歌一首并短歌○天
平十一年巳卯夏六月大伴宿祢家持悲傷亡妾作歌一
首　弟大伴宿祢書持即和歌一首○又家持見砌上瞿
麥花作歌一首○移朔而後悲嘆秋風家持作歌一首
又家持作歌一首并短歌○悲緒未息更作歌五首○天
平十六年甲申春二月安積皇子薨之時内舎人大伴宿
祢家持作歌六首○悲傷死妻高橋朝臣作歌一首并短
歌

雑歌　行幸羇旅遊宴挽歌ハ一ト段のくさぐさの歌を載たり

天皇御遊雷岳之時柿本朝臣人麻呂作歌一首

持統天皇なるべし。次の歌どし持統の大御代の歌なれバ也。雷岳ハ雄略紀
七年天皇三諸岳の神形を見んとおぼしめして少子部蜾蠃ニ詔
せしのバはひきてる三諸岳ニ登りて大蛇を取てみする事、雷ひかりて目かゞやく
るに畏ミて岳ニ放しめ給ふ名を改て雷とよぶるよし見え、又大和国高
市郡雷村とて飛鳥の神なび山にして、かくをいふと訓べきやとおもはるれ
これどおぼしいかづちの丘といふハいかづちやまと訓べくもあるを今ハ取らず、
その山に行幸ありし時人麻呂の法依ておよみしなるべし

皇者神二四座者天雲之雷之上爾廬為流鴨

おほきみハかみにしませバあまぐものいかづちのうへにいほりせるかも
おほきみハ皇を申す、現神遠つ神など申て天皇を申神としてまつる

ませバ、天くもの雷のうへにいほりせさせ給ふといふ也。いかづちの名ま
嗔槌(イカリツチ)なるよし。紫伴ハ入つちハ云へて神の名をつけていへるにて、蹄槌(ツチ)
足摩乳(アシナヅチ)手摩乳(テナヅチ)などの足手の同じ。いかづちハ依て造りて稱ふる也と云。又
巻十三ハ三諸の山をかつ言葉しらみられば、みぬ敷まうしきや、流ハ須の渫
よろしいかをせたまふとうたんとある人の云へる

右或本云獻忍壁皇子也。其歌曰。王(オホキミ)神座者。雲隱(クモガクル)伊加土
山爾宮敷座(ヤマニミヤシキイマス)　忍壁皇子ハ天武天皇の皇子也。續紀慶雲二年五月
薨とみゆ。此皇子の宮雷山のあたりにありしにや、いかづちは雷よりいへる歟。ハ
知とはしる、依知しるといへる

天皇賜志斐嫗(シヒノオムナ)御歌一首　天皇ハ持統天皇なるべし。續紀和銅元
年六月志斐連の姓を賜ふよし。姓氏録、志斐連大中臣同祖のよし

不聽跡雖云強流志斐能我強語此者不聞而朕戀爾家里

いなといへどしひするしひのがしひがたりこのごろきかずてわれこひにけり
字のまゝ志斐能の能ハ巻十八志なさくるの吉美能(キミノ)等のかくよみて字千
四努奈能我(シヌナノガ)など、又努奈那(ヌナナ)など、又伊母能良(イモノラ)妹根(イモネ)など
みえて此能ハ助も相も同じく書るもやあらむといへる説あるべし。稻ハ字千
四ましく、いつ人、此者ハ此者の俗ありて、此老女志ひて物語などいうて
を申しているせぬ時さえるうちに久しく聞ずハ又〻又〻まさりけりとまで〻く

志斐嫗奉和歌一首　嫗名未詳

不聽雖謂話禮話禮常詔許曾志斐伊波奏強話登言

いなといへどかたれかたれとのらせこそしひいはまをせしひがたりとのる
嫗ハいなかたりとおほせらるゝのよし。志斐伊の伊ハ宣長云、助辭
なり。継體紀、愷那能倭俱吾伊(ケナノワクゴイ)、續紀宣命、藤原仲麻呂伊、百濟王福信
伊、續後紀宣命、帶刀舍人伴健岑伊、條中さなた本の関守伊ハ巻十二

ゐちまる妣伊ちが係まく、のゝせこそハ乃ゝせバこそのたぐと号けり、例之、係語
の語の字ハ荒木田久老がもしるる古本に語に作れるによりて、改めし語ハ誤ともいふべし

長忌寸意吉麻呂應詔歌一首　右同じ難波宮の時の事へ幸
しみひし度のうたなるべし

大宮之内二手所聞網引為跡網子調流海人之呼聲
おほみやのうちまでこきこゆあびきすとあごとゝのふるあまのよびこゑ

二手ハた右手とまでの假字に用ゐること同じ、網とかゝんとて多くの人
をなあつむるを網子調するといへり、海邊ハ大宮ちかくありしなれバこそおほの
やうえしをきこゆしくちかひてよみてなれる之

右一首　こゝも難波へ幸の時のうたなるべしが疑ふるかなるべし

長皇子遊獵路池之時柿本朝臣人麻呂作歌一首并
短歌　天武天皇の皇子也、後紀霊亀元年六月薨ともへ、獵路ハ大和十市郡

鹿路村といふあり、そこなるべし、巻十二ハ遠津人獵路池とよめり、上にも一つの
獵の字を脱せり、活本によりて補へり、池ハ野の誤なるべし、こゝもかゝる
と聞えあり、

八隅知之吾大王　髙光　吾日乃皇子乃馬並而
やすみしゝわがおほきみたかひかるわがひのみこのうまなめて
三獵立流弱薦乎　獵路乃小野爾十六社者伊波比拜目
みかりたゝせるわかこもをかりぢのをぬにしゝこそハいはひをろがめ
鶉己曽　伊波比廻禮四時自物伊波比拜　鶉
うづらこそいはひもとほれしゝじものいはひをろがみうづら
成伊波比毛等保理恐等　仕奉而　久堅乃　天見
なすいはひもとほりかしこみとつかへまつりてひさかたのあめみる
如久　真十鏡仰而　雖見　春草之益目類四寸　吾

ごとく、まそかゞみ、あふぎて見れど、はるくさの、いやめづらしき、わごの
於富吉美可聞
おほきみかも

日のみこハ長の皇子をさす。此ら皇子をもて申せ給ふ、わが君と称すべし、十六ハ猪鹿をいふべし。十六ハ四々の義を借れり、いはひのハ発語、拝ふせるも、ふせおろかにもみれど、宮も伏のかく、をろがみ、をろがみて、州べし。をろがむハおれかゞむの略なり。やがてをろがむ者也。拾古紀曰鐵弥天とみて、かくのごとくハ、はんぐるといふなり。集中同の字をかきて、またかくしそれを枕詞にも冠にもとあり。されど、益いやと訓べし。巻十二によひゆゑの益まさりてなんハ、いやと訓ぜしてかくかきたるあれど、また見れども証あるといひてもみえてはなれぬも

反歌
久堅乃天歸月乎網爾刺我大王者蓋爾為有
ひさかたのあめゆくつきをつなにさしわごおほきみハきぬがさにせり

大の字あまりて孫作ぶて見れバ、いひしかく皇子を仰て、蓋とも見なしたるなり。網ハ綱の誤なるべし。蓋ハ縁をつけるものなり。和名抄蓋伎奴加散、儀制令蓋皇太子紫表蘇方裏頂及四角覆錦垂総、親王紫大纈云云、今のハ四角ありて侍従の持る蓋のさまなるべくあれど、月のやうなるハ古へハ円くなるべし。周礼ニ為蓋象天、晉書ニ天圓如倚蓋といひ、又かくみな蓋のまろきより云ふ。また蓋のたりに縁を付て、侍臣のひかへてありて縁にさしといへるあるべし。伊勢太神宮式の蓋の下ニ緋綱四條とある是也

或本反歌一首

皇者神爾之坐者真木之立荒山中爾海成可聞

おほきみはかみにしませばまきのたつあらやまなかにうみをなすかも

是ハ右の池のことハさらにいへるにて、今のさま皇子のつくらせ給へるなるを、此池をほめてせ

給ふ事なりし時の今のまへに、おほ堀給ひしが広くなるべし、荒ハあらき

の荒にて人気遠きをいふ。又海ハ池をいふべく広くなるをいふ也、又荒木人なき

のまなかにうみなすかも

弓削皇子遊吉野時御歌一首　天皇の御子也

瀧上之三船乃山爾居雲乃常将有等和我不念久爾

たぎのへのみふねのやまにゐるくものつねにあらむとわがおもはなくに

人のうへを思ひてへといふ也、常にあるものゝ、三船の山吉野の内也、おもふにそのお

とおもひ侍へ、なくハぬの世をおもひぬ也、その事ハ吉野の離宮に

遊びおはして、なげくおもひてあそばされど、此身のつねなれハ此山

の雲のあつまりぬるハ、生死まぬがるゝ事なし、是六人の命のかぎりある事

しかみのしきのうへのくもの、常になきがごとしと也

春日王奉和歌一首　志貴親王の子大宝三年六月卒とみゆ

王者千歳爾麻佐武白雲毛三船乃山爾絶日安良米也

おほきみはちとせにまさむしらくもゝみふねのやまにたゆるひあらめや

王ハ弓削のみこをさしていふ、此君ハ千とせにましまさむ、白雲も三船の山にたゆる日ハあらめや、此歌ハ後のみことゝせり

なぐさめまゐらせて

或本歌一首

三吉野之御船乃山爾立雲之常将在跡我思莫苦二

右一首柿本朝臣人麻呂之歌集出

長田王被遣筑紫渡水島之時歌二首　長皇子の孫栗田王の子也続紀天平九年六月卒とみゆ

如聞真貴久奇母神左備居賀許禮能水島

きゝしごとまことたふとくくすしくもかんさびをるかこれのみづしま

景行紀十八年海路より葦北小島に泊まして大御食進せる時、御食中水なかりきて神に祈たまへれバ寒泉崖より涌出たりとて此を水島といふ由も見えたり、和名抄肥後国葦北郡葦北、菊池郡水島とあるも、仙覚が抄に風土記云、球磨乾七里海中有島稍可七十里名曰水島、島出寒水、水逐潮高下云々、奇くすしと訓べし、巻十八にくすしき事、おやまは久須志美巻十九久須波之伎とといひつぎたり、神さびは出、居賀の賀ハ哉の意、これハ此と同じ

葦北乃野坂乃浦従船出為而水島爾将去浪立莫勤

あしきたののさかのうらゆふなでしてみづしまにゆかんなみたつなゆめ

野坂の浦は葦北の郡なるべし、ゆめハつゝしめといふことく勤の字をかけり、

浪立なゆめとのれといひおもしろき也

石川大夫和歌一首 名闕

奥浪邊波雖立和我世故我三船乃登麻里瀾立目八方

おきつなみへなみたつともわがせこがみふねのとまりなみたゝめやも

わがせこハ長田王をさして、浪立なゆめといひし答に、よし浪ハたつとも、みふねのとまる所ハなみもしづかなれバ、船の泊つるさまにあらじといへるよりおもしろくなりにける也

右今案従四位下石川宮麻呂朝臣慶雲年中任大貳又正五位下石川朝臣吉美侯神亀年中任少貳不知両人誰作此歌焉

此集大夫とあるは五位の人をいふ、続紀を考るに宮麻呂は此頃よいへるごとく四位なれば大夫とはいふべからず、吉美侯は養老五年従五位下にみえて少貳に任られしかば、されば此石川大夫は宮麻呂にて吉美侯なるべし

あるハ岩野ハ神亀五年戊辰太宰少弐石川足人朝臣遷任餞于筑前
国蘆城駅家歌三首とあり此足人也古須の誤れり

又長田王作歌一首

隼人乃薩摩乃迫門乎雲居奈須遠毛吾者今日見鶴鴨

はやひとのさつまのせとをくもゐなすとほくもわれはけふみつるかも

太とほし度なれバ誤詞よ又といふか、はやひとの又ハ枕詞とせり、宣長云この
隼人ハ国名なるべし、隼人の国ハ続紀にみえ此時ハ薩摩ハいまだ国の名
ゆあらで、隼人国の内の地名なるより後に紀の例よもいくあれども名の訓
ハなし、和名抄隼人司波也比止乃都可左とあるを見ても知らし、又ほの男孫
也、和名抄薩摩国出水郡ニ勢度郷あり、その入海なるべし、此六隼人
の瑞門の見ゆるてあゆまるところよりあるも此王紀伊国の班田使なりど
ゆくまれるなりしかされバ薩摩まではわたらずして此せしとよりきこゆるにてよめる

なるべし、やおなりてハせとみのめぐくそ

柿本朝臣人麻呂羇旅歌八首

三津埼浪矣恐隠江乃舟公宣奴島爾

みつのさきなみをかしこみこもりえのふねこぐきみがゆくかのぬしまに

舟公宣奴島爾のみやまその例よりなし、字の誤れるなるべし、試よいはゞ舟
令寄敏馬崎爾あるべしみるめんさらバふねハよせなんみぬめのさきにと
訓べし、宣長ハ舟八毛何時寄奴島爾とあらんハ毛と公一字の誤、何
時を脱し、寄を宣の誤れるなりとして、ふねハいつのよせんぬしまにと
訓て、いづれまても有べし、先ハ西の国へ旅行して、難波のとまりより船
出せし日のうたへ、先云風吹バ浪のうえんと候ふまつぶのまに浦隠れて
といへる歌なるべし

珠藻苅敏馬乎過夏草之野島之埼爾舟近著奴

たまもかるみぬめをすぎてなつくさのぬじまがさきにふねちかづきぬ

もかるハいづくにても海にかりとる也、夏草の枕詞、みぬめハ敏馬

野嶋ハ淡路なり

一本云處女乎過而夏草乃野島我崎爾伊保里為吾等者

巻十五ニ誦古哥とありてこのうたを載たり、處女ハ敏馬の誤なるべし

粟路之野島之前乃濱風爾妹之結紐吹返

あはぢのぬじまのさきのはまかぜにいもがむすびしひもふきかへす

初句四言、あはぢハ淡路国也、集中にいもがむすびしといふ事多くて下紐までハふたりの紐をもちかはして結の時いひて結ぶ事を云、こゝハ風吹返すともよみたれバ下紐にハあらで、格の衣の肩に付る紐也、古事記仁徳記口子臣紅紐つけたる青摺衣をきたる云々、此頃紅紐を拂て皆紅色に変るよしみえ、このほか天武紀ニ長紐結紐など見えたり、大嘗祭式縫

殿式ニも見え、昨亮紫東抄ニも見ゆるハたゞみじかきをいへるにや

吹返すとよむべきなり

荒栲藤江之浦爾鈴寸釣白水郎跡香将見旅去吾乎

あらたへのふぢえのうらにすゞきつるあまとかみらむたびゆくわれを

あらたへの枕詞、和名抄播磨国明石郡葛江布知衣、巻六長哥、荒妙の藤井が浦ニ鮪釣ともよめり、これも同所にや藤江の浦ニ船出したりけるとよめりしハ今ハ国ぶりと云く、古事記ニ為釣海人之口大之尾翼鱸

一本云白栲乃藤江能浦爾伊射利為流

巻十五ニかくて載、しろたへハ白栲ハ誤なるべし

稲日野毛去過勝爾思有者心戀敷可古能島所見

いなびぬもゆきすぎがてにおもへればこゝろこひしきかこのしまみゆ

いなびぬハ播磨国印南郡、可古ハ應神紀、播磨国鹿子水門へ諸縣君

牛鹿皮をかくぶりて来るしるやこゝに知と鹿子出つといはつます、しかれば、
像の出やうるふのごとく、いなびせの家よりと行く見ゆる本文のこゝのふれ
きしと印南かての像のうへゆるごとく、久未伎可古ハ阿古と作れるなり、しかし阿古
ハ吾子のことによみなしてよ、河古の像ハ巻七為乎ものかゝるハ作る伊呂眼に吾妹ハ
の俤ひえむハひろえん、此の風にそりてきゝ阿古の海のあさけの浪にむさかすむ、
さらに、ものの俤者の名寸の浜辺とも、家猶の海の朝けのなごりともよ
みされバ、何でもなでも一つやうらんえぐ、猶は未かるべきよし、いつゝにてもと
よみけるを此ひへバ阿古にせんすらきもるべし
一云潮見 潮ハ湖の借字にて集中みなとしよめる像よく、かての時とつて又は伐
ふみえびとハかこゝにそるる時ハ、みまそのてことよしとす
留火之明大門爾入日哉榜将別家當不見
ともしびのあかしおほとにいらむひやこぎわかれなんいへのあたりみず
とりとひの枕詞、大つハ海つよく、播の小門と手やくしこの山よつくと知
べし、次ゑ明門といへる名同じき説もあり、ある人明石つハあかしあかりと云ふ
し大とおりのみ出る像ち着しいつれど、巻十三奥十ゐ三辨云山とあハ、お
きそしと大占葉と見きてらる意、又大又大母とおちればとのうね像もしべし、
宮ちに明石の門に入らぬおもハ大和の国も見えしを此門にはいりくハ見へ
えず家なかむといえ、こぎわかれしと八今もので見えさるよものゆえ
むづかるを別るといふつく、家當みえんハいへのあたりみえずしとあるゝ
やのるゆゑへうつてみんゑべしとあり大うなるべし、此歌まてハ西へ行旅
の歌にて、次の二首ハ帰る時の歌也、又ひと人麻呂旅宿之ひる時の
ゑとして歌るハ此時と同じうてびなつるを、後によりておよそ入れるよ
やおきらいかやもつれぞ
天離夷之長道従戀来者自明門倭島所見

あまざかるひなのながぢゆこひくれバあかしのとよりやまとじまみゆ

あまざかる枕詞、ひな八都遠き所をさしていへバつゞくと心得ればなり、
やまとじまハ大和国を大倭秋津洲といふによりて、異く倭嶋とも
いつ久巻十五ふも新羅へ使人の歌ふ国をしのぶ、うな原の沖へをさと
をしいさる火ハあかしてともせやまと嶋見んとふ歌ありサを地のかなめし
国でやましきねなるハ大八洲といふれて今とハ別く

一本云家門當所見　門ハ乃の誤なるべし

飼飯海乃庭好有之苅薦乃亂出所見海人釣船

けひのうみのにハよくあらしかりこもの みだれいづるみゆあまのつりぶね

けひハ越前の地名こゝにいへるハ...
...久老説ある...
さらバ...

一天離をいふ、かりごもの枕詞、ちゞくなつてこハみだれぬるにかゝれば、
無の地の和るとよれしとかいふも見のづかふ見えて、いつくしぞ武庫
あまさかれおほかるさとよろし

一本云武庫乃海舶爾波有之伊射里為流海部乃釣船
浪上従所見　武庫ハ摂津国にあなかふはとハ舟を出すふよきのどかなる所ぞ、
いさりなりと...いつり

鴨君足人香具山歌一首并短歌　続紀天平宝字三年十月天下
諸君字を公字に換...高市皇子の...近江荒都...
香久山を...
人麻呂のおよ同じてよ之

天降付天之芳来山霞立春爾至婆松風爾池
あもりつくあめのかぐやまかすみたつはるにいたれバまつかぜにいけ

浪立而、櫻花、木晩茂爾、奥邊波鴨妻喚、邊津方爾
なみたちて、さくらばなこのくれしげに、おきべにはかもめよばひ、へつべに
味村左和伎、百礒城之、大宮人乃、退出而、遊船
あぢむらさわぎ、ももしきの、おほみやびとの、まかでて、あそぶふね
爾波、梶棹毛、無而不樂毛、己具人奈四二
には、かぢさをも、なくてさぶしも、こぐひとなしに

おもてつゝ桃花、池波ハ埴安の池波也、このくれしげにハ木ぐらき也、巻十八
許能久礼之氣爾とかけるもおなじ、このくれしげにハしげくしてといふ
意このくれしげにハ、後句の下二句をそへて脱せるか、おきべハ埴安池の沖也、かもめの名ハ
群の名也、味村のむらとむれへて知べし、遊ぶ舟にハとハ遊ぶべき舟にしてと云
也、梶さをしなくてハ友舟によるに舟人のなきこととかへる也

反歌二首

人不榜、有雲知之、潜為、鴦與高部共、船上住
ひとこがず、あらくもしるし、かづきする、をしとたかべと、ふねのへにすむ
あらくハあることと延ことぞ　和名抄崔豹古今注云、鴛鴦　字之同丹宗
雅注云、鸍　多加閉とあるも
何時間毛、神左備祁留鹿、香山之、鉾榅之本爾、薜生左右二
いつのまも、かみさびけるか、かぐやまの、ほこすぎのもとに、こけむすまでに
いつのまにハいつのまにかなりと也、かんさびたるこのの、このほかにいつのほとふつの、ひとたへ
よりてとゝるまゝ、鉾杉ハ杉の異名ハ鉾の如くなれバいふべし、
さて杉の木に苔の生るハ久しきにつきてなべてあるべきをかくいへる
ハ集中おほし、たとへばたかき杉の木に苔生るまでおもひいでことあるら
べし　巻二　娉ぶるは代までひめ歌のす杉が末に苔生るまでにとも
いへれバ歌人ハ本ハまの作か、持統天皇十年高市皇子

子をめでまして悦て手拍てうちふまらくみかしこきみなるかも　杉の
木立も繁みのしるおぐらしにはつのもふかくまの鴨よなくなんといふ

或本歌云

天降就　神乃香山　打靡　春去来者　櫻花　木晩茂　松風丹　池浪飆　邊都遍者　阿遅村動　奥邊者　鴨妻喚　百式乃　大宮人乃　去出　榜来舟者　竿梶母　無而佐夫之毛　榜与雖思

右今案遷都寧楽之後怜舊作此歌歟　此注は後人のかきそへたる也

香久山の事をいへるかたれば、荒たる後に見てよめる歌とする説もあれど和銅三年之

柿本朝臣人麻呂獻新田部皇子歌一首并短歌

天武紀次夫人五百重娘新田部皇子を生まし給ふ

八隅知之　吾大王　高輝　日之皇子　茂座　大殿

やすみしゝわがおほきみたかひかるひのみこしげくいませるおほとの

於久方　天傳来　白雪仕物　往来乍　益及常

へ　ひさかたのあまづたふくるゆきじものゆきかよひつゝいやとこよ

世

よまでに

日のみこ、こゝは新田部の皇子をさす、茂座は敷座の借字也、白雪一
本白雪とせり、二字ゆきとよむべし、常は萬の誤なるべし、あまづ
たひくる云々は、空より降来る雪のふるごとく、年々常に流らふとも
ゆふ誤てつて日じきを之、ゆききてつてとせてをとこの此今皇子の八釣
ゝ山荘のまちくは藤原の都よりて往来し給ふ人ゝ多くありて常
よみをるなるべし、詳しく雪のごとくふり来つりて常にかよひませていや
ちよ久老云、常は座の誤にて、往来乍益及座世をゆきかよひつゝいや
しきいませとよむべし、及座は蓋座の誤にていつきいますべき歟、考へん

反歌一首

矢釣山木立不見落亂雪驪朝樂毛

やつりやまこだちもみえずふりみだるゆきはくこちたるあさたぬしも

矢釣一本矢騎とかきて、やつりハ顕宗紀近飛鳥八釣宮とあれバ飛鳥の地なること、皇子の山荘此山にありてみえたり、驪をはこちと訓たれど、驪ハ馬深黒色とあれバはこちと訓べきよしなし、驟の誤なるべしむかしハはせと訓べし、驪ハ驟の誤なるべし、驟ハ字書に履不著跟曳之而行言其遽也とあれバさわひてと訓べし、さて此句まゐりくらくもとよみて八人ちかの皇子の殿にまゐりつかへしとなれさ、是ハよろこびて雪に騒ぎわがちの冬木の梢ハ花咲にたとへよあれバさもあるなんか猶考べし

従近江国上来時刑部垂麻呂作歌一首 目録に刑部垂麻呂

馬莫疾打莫行氣並而見弖毛和我歸志賀爾安良七國

うまなはたくうちてなゆきそけならべてみてもわがゆくしがにあらなくに

従近江にしてよしとみて別しのさ

けならべて八日並べてと云に同じく日数をかさねてといふ。此ハ言ふものゝておもしろくてみてゐるわれどいは並べてつくゆんとわかるなねバ志賀にはあるととどめてのんびよいるとおもふやんてはそぐゆかすのれいらきいひ人大津宮の旧都にまれてるにハなつてなれバ衣服田畑るすどうきし、ゆゝく、なとよる故よてのなごりと思ひてよめるふなるべし　七八七の誤之

柿本朝臣人麻呂従近江国上来時至宇治河邊作歌一首

物乃部能八十氏河乃阿白木爾不知代經浪乃去邊白不母

ゝのふのやそうぢ川のあじろぎにいさよふなみのゆくへしらずも
あじろの杭将、あじろ木ハ平川の中におほくと広く下を狭く網をはる形
にしたるに透間なく杭を打て、しもにてかたを水に漬かけ留るを待て
網代する杭木の内へせかれて流入る氷魚の、床の簀の上に打よせられば氷魚ハ
漏て簀の上に留る魚の、その網代の床にしたるとみへ、いさよふ波ハ時のまを
きて見る事も、いさよふ月といへる八月の如んよしと同じくいふいさ
よふ浪ハ、おもふ事ありてよどむをいふべし、不知といさのうるふ事
ちるハ、字中にいさや川を不知也川とかける如く、いさよふ流のうへよ
りよ知ぬと、人世の事をなぞらへられたり、宇治の網代に聊へよりける
みつきて、殊に哀しく思はれける、七人麻呂の家の集に、此歌の
心ぐるしく、彼此のみなをのこし、世の人家ハ丈夫ハ同じく大体の三つの遺べ
とうかにしよみとる波のゆくへしらずといへるに同じ

長忌寸奥麻呂歌一首
苦毛零来雨可神之埼狹野乃渡尓家裳不有國
くるしくもふりくるあめかみわのさきさののわたりにいへもあらなくに
神之埼ハ七ヶ所のうちのおくなれバ、かみのさきにいへどもみわのさきとよむべし
そみハ浦といへ八、紀伊国牟婁郡のうちに新宮より那智へ行道の海べに、
新宮よりこの崎一里ばかりありて、そこに佐野村といふ字をいふ
又狹野ハ神武紀に狭野を越て熊野神邑に到ますとよしあり
渡りハ舟にて渡る所をいへり、又ハ過とかくべきをかりにいへり
是は此歌林風の巻に歌よませられける也、牟婁郡に大和の三
輪といふ人も有れど、ことにさまよはでも前にいへるが如く此
よみ人ハ紀伊国の歌人なれバ此の歌も三輪の崎也、かく解て
さるにても此の三輪の崎をよし山ハそこにあるべし

柿本朝臣人麻呂歌一首

淡海乃海夕浪千鳥汝鳴者情毛思努爾古所念

あふみのみゆふなみちどりながなけばこゝろもしぬにいにしへおもほゆ

紀の歌に阿布彌能彌（アフミノミ）とあれば、かくよめり。夕浪千鳥は夕浪に立さ
ぐ千鳥をいふ。こは心も志ぬには、集中に朔旁之努にぬれて、同
意なるをしなえて小竹野（シヌ）にぬれてとよめれば、志ぬも大かた同じく今の俗
言にしをれしほたるゝといふに同じ。さてぬるはあると言ひ夕の千鳥鳴
きく心をとれて、いとゞ心しをれしめりて、そのかみ古都のさかりの事は
盛なりしなどを思ひ出て

志貴（シキノ）皇子御歌一首　天智天皇の皇子、霊亀二年八月薨、追尊して
春日宮天皇と称

牟佐佐婢波木末求跡足日木乃山能佐都雄爾相爾来鴨

むさゝびはこぬれもとむとあしひきのやまのさつをにあひにけるかも

和名抄本草云鼯鼠一云鼺鼠和名毛美、俗云無佐々比。こぬれは木末也、荒六卷
七に出たり。さつをは幸人にて、猟する人をいふ。此御歌は、人の諸ぐる鮨
りみして身をそこなふにたとへ給へるにや。此皇子の御あにゝ大津皇子をし
又すめ大友大津の皇子たちの御すゑをおもひて、かゝる御よみ給ひて此歌
おぼすべきこと

長屋（ナガヤノ）王故郷歌一首　天武天皇の御孫、高市親王の御子也。作保大臣と号

吾背子我古家乃里之明日香庭乳鳥鳴成島待不得而

わがせこがふるへのさとのあすかにはちどりなくなりしまゝちかねて

わがせこは親き皇子たちをさしていふ。明日香は天子此王の住給ひし所
て移給ひてより後の皇子の都で見ても有なり。明日香より藤原の
都へ移りたるなるべし。されば古都とはいふ。歌しきみてのちに住給ひし

どころとよみべし、島ハ君の誤りなるらん

右今案從明日香遷藤原宮之後作此歌歟　此詞に考ふるに

あるいハ此詞ハなくもよし、後人の作也

阿倍女郎屋部坂歌一首　三代実録　高市郡夜部村とあり、其の坂なるべし

人不見者我袖用手将隠乎所焼乍可将有不服而来来

ひとみずハわがそでもちてかくさんをやけつゝかあらんきずてきにけり

此哥の意ハ、さして誠に以下序なりとみるハ其の事もなくおのはざりける

山あるとさんと、衣ハやれてのあるらん、まことにしてさまで名のりかくれと云の

此歌さんとおもふに、我袖にて覆ひかくさんものを、我云のごとさわりてもなきこと

鞍てよみたるや、きつてハ来来ハ坐来の誤なるべしと云かたし訓べし

高市連黒人羇旅歌八首

客為而物戀敷尒山下赤乃曽保船奥榜所見

たびにしてものこひしきにやましたのあけのそぼふねおきにこぐみゆ

巻十四まおなじく赤曽保船のあけの色にぬりて赭土にとよめり

とこうハあけのそぼ舟ハ赭土もて塗る船ハ、巻十三左丹塗の小舟

もかし、又なほその後に引ける小舟、巻十六おきつかや赤羅

小舟ともあり、あけとよまるべきことをわざとさて宜しとなるハ宮人の

官人の船なるん、禄よりよりてさる舟を漕出て沖へ行くハ哀なるの

船なるんとぞ、哀ふかくおもひやりて、まで美さきことなくてかの主義

云、山下やまとて訓べし、こハ赤の枕詞にて、さるゆゑハ赤を紀の春山の紅葉

壮士、秋山の下氷壮士とあるゆゑに巻十秋山の舌日下とよめるハ、紅葉の色を

言ふとひハ紅葉のもじりとす、然しそれば山下ひ赤とつくこと之巻十五

あり、の山下ひかるもみぢの、又巻十八橘の赤き色の匂へる庭よ、巻六まで、へるい

ちかよハ山下ひの言縁なりて、さてまた、これらも下ハ借字なり、赤さす

也、此二ぞとりかしこれハ下ねきふのくに限らず、赤く鳴るをいへり

櫻田部鶴鳴渡年魚市方塩干二家良進鶴鳴渡

さくらだへたづなきわたるあゆちがたしほひにけらしたづなきわたる

あゆちハ紀ニ尾張国吾湯市村、また和名抄尾張国愛知郡阿伊知、とて小作良ハまへかきての田くさいはふさくら人ことよみてめ活る町つくれるゝく倫ざらんといへるさくなるんと契沖いへり

四極山打越見者笠縫之島榜隠棚無小舟

しはつやまうちこえみればかさぬひのしまこぎかくるたななしをぶね

其六歌波宗者の何、ふ浜田より西ではくる四八津のあるとよめり、此ちゐハ和泉にて、さそつハ摂津之、雄略紀ニ呉より献る手末才伎をとまらく住吉津ニ泊す、此月呉の客の道をつくりて礒歯津の路ニ通ふ、呉坂となづくとあれバ、此しはつの坂路を越てく見ゆる、さし湊ふ、笠縫の節にかゝりけるべし、斎宮式ニ御輿の料の菅蓋ハ、棚ハの笠縫氏が奉ると見られどもこをもおこすべし、こと始め小舟の棚隠るゝをいふ

やくへ棚なき小舟ぞ也

礒前榜手回行者近江海八十之湊爾鵠佐波二鳴

いそのさき(いそざきを)こぎたみゆけばあふみのうみやそのみなとにたづさはになく

やそ八十べく数多きをいふてふまくは此湊のあまさといへり、又近江ニ坂田郡ニ礒崎(イツサキ)村といふもわかく湊く、彦根まで八十の湊ハ今八坂(ハツサカ)村よりふ下へとあへるいふよれともあれ八十の湊ハ一所の名ときこてゆまり定まれり、鵠 和名抄久々比とあり、久老のいへる古本ニ鵠を鶴ニ作る、又五雑俎鵠即是鶴也とあれバ鵠をもたづと訓べし　未詳　さなか此二字誤て入るか、隠べし

吾舩者枚乃湖爾榜将泊奥部莫避左夜深去来

わがふねはひらのみなとにこぎはてんおきへなさかりさよふけにけり

枚ヲ牧ニ誤

比良ハ近江志賀郡也、湖の中みなとよめり、からさきのことハ卷五なる大舟柯
里と言り、沖の方へ漕出るをいふなれといふ、卷七に此句を明旦石
之湖として再載たり

何處、吾将宿、高島乃、勝野原爾、此日暮去者

いづくにか、われはやどらん、たかしまの、かちぬのはらに、このひくれなば

卷五卷十四伊豆久と云り、古事記に伊豆久能迦爾、また伊豆久爾伊豆流など
あるを、こゝハ後の歌によハいづこといへるよしこれにつけて、かち野ハ近江高島
郡三尾の勝野の原なるべし、卷七大御舟泊てゝさもらふ高島の三
尾の勝野のなぎさしおもほゆとあるハ、この高島江の勝野のことなるを
まきて出るへ、こゝの廣くてやどるべきところ遠きなるべし、
二の句に依てかく書かれたり

妹母我母、一有加母、三河有、二見自道、別不勝鶴

いもわれも、ひとつなれかも、みかはなる、ふたみのみちゆ、わかれかねつる

一つなれかもハ妹も吾身の二つならぬ心持なるを一つなれバなりといふ、三河なる
二見と云地名なるべし、思へ二河の住ちかひて作るよしいふ時、よく二河に
て末に出せる橋詰などを見て大和へゆくに、あまハ真に、やまとへ帰る
とて別るゝ所もあるなるべし、一つなれもといひ、又ふたみといへるなり
趣をまねびたるなり

一本云

水河乃、二見之自道、別者、吾勢毛吾毛、獨可毛将去

みかはの、ふたみのみちゆ、わかれなば、わがせもわれも、ひとりかもゆかむ

是ハ吾せといひ、末のことも妹が黒人に答ふる歌なれど、ほかならぬ、黒人
妻和歌とて、ハその次に載たりしが、端詞落て乱しそのころ

速来而母、見手益物乎、山背、高槻村、散去奚留鴨

さくささてゝみてまゝものをやますろのぐろつきのむちゝちゆとになるらし
ちへハ泉の村といふこれ之をとりていひて例えハその村のなみぢのあさふといふことらし
いつりわすかすか日の山ハ咲みるゝもなどゝこの卯ゑなみぢといふべしとて咲
ちきのみいつる執ゐし

石川少郎歌一首　右詞ハ石川君子のすゝむるハおぼつかれ　ゆゑ女の
ふしえあれバ少ハ女の誤なるへし

然之海人者軍布苅塩焼無暇髪梳乃小櫛取毛不見久爾

しかのあまハめかりしほやきいとまなみくしげのをぐしとりもみなくに

しかのハ神功紀ニ磯鹿海人とみえ、筑前国風土記糟屋郡資珂島とあれ
バ筑前之、めハ和海藻滑海藻昆布の類之、ある人軍ハ葷の誤也といへり、
さるハ葷昆同音なれバかくなるなりと久老説之、髪梳とかけれど
ここハ櫛匣之くしげてふよしのことのことくるしかれとくるしの、又髪梳二字

ゆきとよみてゆけるのなぐしなるらんとあるへしいつるなり考べし

右今案石川朝臣君子號曰少郎子也　何の拠ありてかく申人あるにや

高市連黒人歌二首

吾妹兒二猪名野者令見都名次山角松原何時可将示

わぎもこにゐなのはみせつなすきやまつのまつばらいつのしめさむ

和名抄摂津国河邊郡為奈、神名帳摂津国武庫郡名次神社あるし、次で
古くあきしいへり　つのゝ松原ハ和名抄武庫郡津門郷都止、そこなるべし、ま一個の
衛しるしあるく巻十七都努乃松原おもひゆくことよみてしかへんかんへの
ことは便宜添書てつけ分作孫ならずうへにかせしものゝ事之

去来兒等倭部早白菅乃真野乃榛原手折而将歸

いざこどもやまとへはやくしらすげのまののはりはらたをりてゆかん

此まのハ摂津八田部郡之、白菅ハ遠江白須賀など云ふかくとほの人

のうたにしがの湊とよめるハこの歌によりて湊とせるなり、而並に高嶋の勝
野とせる所ハとられず、巻七羈旅の歌に、高嶋の阿渡人のしるしあつて衣に摺らん
高嶋の香取の浦に見ゆれバ是人も古へのことを思ひて此地の
榛を摺つるよせんとてよめるなるべし、いざかゝるハ榛摺に従へし人とをいへる

榛ハ既にいふ

黒人妻答歌一首

白菅乃真野之榛原往左来左君社見良目真野之榛原

しらすげのまのゝはりはらゆくさくさきみこそみらめまのゝはりはら

ゆきくさのさハさまなり、君こそらめ榛とりすべからずとよめるに京へと云るにて

あらそひハ旅の心のゆくさきにあれバ女の身にてすべて見んとの歎きなれバ

よくみてゆくんといへること

春日(カスガ)蔵首(クラヒトノオビト)老歌一首　続紀和銅七年正月正六位上春日椋首老に従五位下を授くる

角障経石村毛不過泊瀬山何時毛将超夜者深去通都

つのさはふいはれもすぎずはつせやまいつかもこえむよはふけにつゝ

つのさはふ枕詞、いはれハ大和十市郡なり、紀に磐余池辺雙槻宮とも見え、続紀に

同じ郡を石村池辺宮とも書てあれバ、いづれもいはれと訓べし、よはふけにつゝの下に去

の字を脱せしなるべし、大宝元年に官人と成しにや、旅へ行人ハ是等の歌の

読より外に又よみたるの歌を集てのせたり、いづれも見えあれど考かゝる類の歌の

中にも定で、まして蔵原よりもさだかにしるべきことなし

高市連黒人歌一首

墨吉乃得名津爾立而見渡者六児乃泊従出流船人

すみのえのえなつにたちてみわたせばむこのとまりゆいづるふなびと

えなつハ地の名、ゆハよりと云に同じ、これらよりのなかの事なども同じ詞なり

ことごとくとも見えて、のちの歌にもや、和名抄摂津国住吉

郡榛津以奈豆、武庫郡武庫とあり
春日蔵首老歌一首
焼津邊吾去鹿歯駿河奈流阿倍乃市道爾相之児等羽裳
やきつべにわがゆきしかばするがなるあべのいちぢにあひしこらはも
老友人とゆきし駿河の国の任るどおそくすぎし時よめるなりやきつハ景
行紀四十年日本武尊駿河にむかひて悪くさる賊を焚
殺されしを焼津といふとぞ、神名帳駿河国益頭郡に焼津神社
もあり、あべの市ハ和名抄駿河国阿部郡に国府ありその府中是也、
府の辺を流るゝ川と云、さればあべの市の別府くに今ハものゝ名のみとあ
てらる詞之下にいでし君ハまだよあらふむし
丹比真人笠麻呂往紀伊国超勢能山時作歌一首
栲領巾乃懸巻欲寸妹名乎此勢能山爾懸者奈何将有

たくひれのかけまくほしきいもがなをこのせのやまにかけばいかにあらん
一云可倍波伊香爾安良牟
たくひれの枕詞、是ハ紀伊の国の夜のまなかりん、笠麻呂ハ老を因
ドくせの山を勢とふおもひかけて妹をおもひかけて
せ山の背よりよみてかへて妹といひたるをうけたるにて、よばでいふよ
あらんと誹るを先するなるべしかへばいふあらんハ一あるまあらで似
るえのことのごとく一句強きるなるべし
春日蔵首老即和歌一首
宜奈倍吾背乃君之負来爾之此勢能山乎妹者不喚
よろしなへわがせのきみのおひきにしこのせのやまをいもとはよばし
よろしなへハ況ふむ、わがせハ笠麻呂をさして、妹をいひしをうけるなるべし、
それにて兄ぞなりしせとりよむ山のなこそてよろしかれ、文ハ妹とかへんとハ

おもひみだれしこゝろなるへし

幸志賀時石上卿作歌一首　名闕

續紀元正天皇養老元年三月美濃國に幸して近江國にいたりて淡海を見給ふよし見え、又条中大臣大納言を卿といふべし、文武の御時より元正にいたるまで石上氏なる卿といふべきは左大臣麻呂公のみ、志がつるを麻呂公同年三月薨とあれば誰をさせるにか詳ならず、久老云大宝二年太上天皇持統三河國美濃國に幸のおん時の供奉のとき志賀にて詠しならん、さらば麻呂公にして叶へりといへり

此間為而家八方何處白雲乃棚引山宇超而来二家里

こゝにしていへやいづくもしらくものたなびくやまをこえてきにけり

家は大和なれば此の方也、大和より近江の御幸まで他国を経て山を越来る

此間にとあり　まづ此方にてつくしやいづくの方にて山のあなたにあるべしとなり

穂積朝臣老歌一首　續紀養老六年正月坐指斥乗輿流佐渡島とあり

吾命之真幸有者亦毛将見志賀乃大津爾縁流白浪

わがいのちしまさきくあらばまたもみむしがのおほつによするしらなみ

老は佐渡に流さるべし、まさきくは幸く也、此歌は配流の時、天地を頼むのゝ意ならんとのかくもよみける

同じきとえ

右今案不審幸行年月　一本行幸とあれど古き紀にもみえず

幸行とあるは行幸とせるなるべし、後人のさかしらなるべし

閭人宿禰大浦初月歌二首（ハシウドノ）　大浦紀氏見六帖の七字後人の書入なるべし、此人の事知られず、くらき山を出る月を詠たれば大和の人なるべし

天原。振離見者。白真弓。張而懸有。夜路者将吉

あまのはらふりさけみれバしらまゆみはりてかけたるよみちはよけむ

まゆみのまへふしは白まゆみのなれバ白まゆみといふべし。やがて弓張月は

いひつけたり。よる人のよみちをなんとゆふゆゑ、吉一本去に作るさらバゆうむく

ゆかれともよかるべし一本のまゝに作れるを

椋橋乃。山乎高可。夜隠爾。出来月乃。光乏寸

くらはしのやまをたかみかよごもりにいでくるつきのひかりともしき

くらはし山ハ大和十市郡也。古事記にハ其の久良波斯夜麻をさかしみと

云、よごもりハ夜こもりて出るなり。揚淳くとりての心とし。此一首の意ハ

くらはし山の高くしてその山かげに夜ふかくなりて月のおそく出るゆゑ、かへる程の

乏しきといふ是ハ神月の光まれなるゆゑにいづもの[illegible]

なるべし。此歌ハ沙弥女王とて、佐伯宿祢赤麻呂がよめる也

全同事を載す。又吉田に家ありてあひけるあとはあれバ表ハこなたにある

らん。しばしバあまたかくてよあるハ表の本の名なるといへる事さへ人ハ疑之

とあるハ主の事を旅せるその

小田事勢能山歌一首　古く小田の女王の作とも、あるのこともあり

真木葉乃。之奈布勢能山。之奴波受而。吾超去者。木葉知家武

まきのはのしなふせのやましのはずてわがこえゆけバこのはしりけむ

まきハ檜之類。桂の枝葉ハしなやかなるものなれバいふ。しなふせとハ其の

種をしならへバしなびあへずて慈しみて越ゆけバ木の葉も知りて

あらんと知らんがれてしなひゆくとりゆく。是ハなかの妹を慕

ふなるべし。巻七　己もまの棚引山の隠てるかとバ木の葉かしるらん

とりよみける

角麻呂歌四首　続紀従五位下角兄麻呂と見え、こゝハ角を角に誤れるといふべし
せしなるべし続紀に此氏を録とも角ともかきまた字書に角を録とあれバ通じ
用ひしなるべし

久方乃天之探女之石船乃泊師高津者淺爾家留香裳

ひさかたのあまのさぐめがいはふねのはてしたかつハあせにけるかも

神代紀阿麻能左愚謎と侍せり、天稚彦高産霊にそむきし
つかひのきじをいとひし時、天探女見て
出せし事あり、其船ハ石樟船にて楫をもて造てかく云と伝ふ
なりしハ神武紀天神之子天磐船に乗て降り出る櫛玉饒速日命
とありて其探女ハ紀ほくハ地神とおもひしを此ふミによれバ天より
下りしハ天稚彦の伏見よりて天より降りし事ありしが天稚彦に媚
こびし神かや、今天といふもよし又は饒速日命の如く此神も

石船にのりて天降れる伝あるにや、摂津国風土記云、難波高津
者天稚彦天降時属之神天探女乗磐舟而至于此、以其磐舟所泊故
号高津云ここと見えたり、いづれも古の伝へなるべし、是によりて
もよめるなるべし、古き難波なるの図を見るに、高津ハ西の入江につゞき
て今の高津といふハ古の地にハ非で、あせたるも八百のさま変りて遠くなれ
来るといふ

塩干乃三津之海女乃久具都持玉藻将苅率行見

しほひのみつのあまめのくぐつもちたまもからんいざゆきてみん

三津ハ難波の三津也、海女ハあまと訓べし、六言の句とすべけれど、女とハ
書るにハあまめとよむべし、催馬楽に久々都とハわらにて編の名
あみたる物にて藻などを入るゝ具也、掌掴にくゞつとハかたみを
いへり、物語さがの院の出そよきぬあやを糸のくゞつにいれてと

久ゑゆ

風守疾奥津白浪高有之海人釣船濵眷奴

かぜをいたみおきつしらなみたかゝらしあまのつりぶねはまにかへりぬ

眷ハかへりみるといふの字なるをかへるといふ言に借てかけるなるべし

清江乃木笶松原遠神我王之幸行處

すみのえのきしのまつばらとほつかみわがおほきみのいでましどころ

清江ハ住吉也とよみつゞく枕詞、笶ハ和名抄に和名夜とあれど巻十子是

日本笶とのこうるふ見り例も、本の下志の字を從さしの

田口益人大夫任上野國司時至駿河淨見埼作歌二首

續紀和銅元年三月從五位下田口益人を上野守とせらる

廬原乃清見之埼乃見穗乃浦乃寛見乍物念毛奈信

いほはらのきよみのさきのみほのうらのゆたにみつゝものもひもなし

和名抄駿河廬原郡廬原伊保波良神名帳廬原郡御穗神社ありいへるに

とある所ハ清見が崎よりみほへ入海をしるくいさゝか見えて入海の如くうけて即みほの

浦とよバるゝよしなり、今見る所ハ巻二十に海づらの南をよそに見つ見ても見えこゝに

れバ、さても古のやうを思ふし此浦の古ろうかなん渡さるしとみれバ皆うつらふさまことに

晝見騰不飽田兒浦大王之命恐夜見鶴鴨

ひるみれどあかぬたごのうらおほきみのみことかしこみよるみつるかも

田兒ハ清見が崎より浦傳ひに東へ行にふるゆる入海をさいふ名をこゝにて還

れるなりん公式令をふんでるにいふへ八驛路遠なれバかゝるさまゝにみゆべし、但

よくたる夜なれバ清言かしくるみとゝいへり

弁基歌一首　續紀に大宝元年三月勅して還俗春日蔵首老といひ

て賜に此者のよしを姓名をかへて挙られて却て俗

名を出せるハ俗なりし時の名を後に傳へてまへしなるべし

亦打山暮越行而廬前乃角太河原爾獨可毛将宿

まつちやまゆふこえゆきていほさきのすみだかはらにひとりかもねむ

真土山ハ木路に入る信土山とかきて大和国よりさかひなる紀伊の山也いほさき

川といふハ古今集にハ武藏なる紀のあたりひとりひたち宿りにハ紀伊国

るまでの宿のすみだ川ともあるべきかとおもへれどもこれハ紀伊国

と定むべし仙覚ハすみだ川ハ紀伊国にて出揚もなく紀ノ川ハ諸

ちる山ハ紀伊国によみたるを山之といへり又その田口大夫の云の記に

まくのみえればこれも猿酒その高ちやなきもみるれどさもはあらず猿

河廬原郡にいはら川と云川と此言のすみだ川之といふ説あ

れどひがこと也廬前も角も河も紀のくにの之

右或云弁基者春日蔵首老之法師名也　紀のおんゆあと或云

とあるハうた作人の名をさだかならず也

大納言大伴卿歌一首　未詳　此二字ハ作人の名と心得べし

倭紀天平三年七月大納言従二位大伴宿祢旅人薨難波朝右大臣

大紫長徳之孫大納言贈従二位安麻呂之第一子也とあるを

奥山之菅葉凌零雪乃消者将惜雨莫零行年

おくやまのすがのはしのぎふるゆきのけなばをしけむあめなふりそね

菅ハ山菅とも麦門冬とも云すげハ蘩き菜のあをきひまで雪の降入る

をいへりこそハ新よ後紀年ハ借てかくかく宮まで行年をさ

まんよしなしにもべて行ハ所の謡まよくそねと訓べしといへりそねハ為ら

ふるさとにゆきはなれぬをと謡ふるを孫ハ新よ詞

長屋王駐馬寧樂山作歌二首

錐ハ雛ノ誤

佐保過而寧樂乃手祭爾置幣者妹乎目不錐相見染跡衣

さほすぎてならのたむけにおくぬさはいもをめかれずあひみしめとぞ

佐保ハ大和也、さほ山ちかきならの坂の上なる旅のたむけにもやぬさをおくこと
なる山といへり。今峠(たうげ)といふもこれなり。同じならの坂にて　菅原
道真太政大臣のたむけ山もみぢのにしきなるべし、幣ハ絹帛之枝にかけて神の
ものなれど、又拙ことにたがへてもあれハ手向くハいつもその神の心にまかせて
ことにかけたるを使ふ人のしるしをさゝぐべきものなり。ぬさおほくかけてまつらして
おもふことなきぬさをささげぬさとしたちぬれて、おのづから
ことにて八今おもんずるへきこゝ、都を旅立てくるに途のみちへよみ
給へるなるべし、此のことハ巻十七や寄る、戸並山の神に
幣まつりまうでのありけやしたまのものを左右に　中器おのづから
といふも同じ、雛ハ離の字の誤なるべきなり

磐金之凝敷山乎超不勝而哭者泣友色爾将出八方

いはがねのこごしきやまをこえかねてねにはなくともいろにいでめやも

磐がねハ岩根也、こごしきハ凝かたまれる也、巻十七許其志可毛(こごしかも)いはの
かんさびたるとかけあれバこゝの訓をこゝろえてハいくもそれなる妹と逢ひ
給へるなるべし、色に出めやもハ色に出さじといふなり

中納言安倍廣庭卿歌一首　續紀神亀四年中納言に任、天平
四年二月薨、右大臣従三位御主人之子とあり

兒等之家道差間遠烏野干玉乃夜渡月爾競敢六鴨

こらがいへぢやゝまどほきをぬばたまのよわたるつきにきほひあへんかも

巻十八ぬばたまの夜わたる月をいくよふとよみて、大空を渡る月と云へ
るをよめるなり、あへんもハ堪んと也、妹がりの道遠くねバ月のゆくに
おくれじとおもふ心なり、是ハおくれんとのこと

柿本朝臣人麻呂下筑紫国時海路作歌二首

名細寸稲見乃海之奥津浪千重爾隠奴山跡島根者

なぐはしき。いなみのうみのおきつなみちへにかくれぬやまとしまねは

なぐはしき枕詞。いなみは印南也。やまとしまねハよそへてひろくも云ど、

大和のくにの事也。いなみの沖に漕出てハ大和の国の山も見えずなりて

来つゝ、沖つ浪のちへに立わたるを、浪に隠るといひなせる也。

きこえハ上に当火のあたりのおなじくよめる同じ度の

大王之遠乃朝庭跡蟻通島門乎見者神代之所念

おほきみのとほのみかどゝありがよふしまとをみればかみよしおもほゆ

みかどハ朝廷也。島門ハ島の間のせまき所をいふ。遠のみかどハこゝ

国々の府又ハ西国までハ太宰府をさしていふ。此ハ都府の官府を

ひなの都としてあるに、物がたりにわがみかどゝ遠のみかどゝいへり[illegible]

後世誤れる也。ありがよふハ蟻ハ借字にて在通ふ也。人々の通ふ道

なりと云。島門ハ潮瀬の水門(ミナト)をいふ。此歌ハ上に同じ人の潮瀬の事あり

神の代より此潮瀬のあたりを船ゆきかよふ事にて、同じ所へ漕れゆ

せるを云、此潮瀬ハ舟ハ古の未より在て、今の世までハ其まゝ潮瀬

のまゝなるを、神代より有てハ見し古の神の御事をいふ

同じくし八助言

高市連黒人近江舊都歌一首　近上見の字歌の字と作の字脱たり

如是故爾不見跡云物乎楽波乃舊都乎令見乍本名

かくゆゑにみじといふものをさゝなみのふるきみやこをみせつゝもとな

此人もかくのごとく物思ひしをもて人にうれへて見せつゝ

されバよそにおもひてよめる人、かゝるハよしなきこと、実に十七の

さらにあるバかりであるんは山がきを見せつゝかなれ

右謌或本曰小辨作也未審此小弁者也

幸伊勢国之時安貴王作歌一首　続紀天平十二年十月伊勢国幸の事あり同紀天平元年三月无位阿紀王に従五位下を授と見ゆ

伊勢海之奥津白浪花尓欲得裹而妹之家裹為

いせのうみのおきつしらなみはなにもがつゝみていもがいへづとにせむ

花にもがの心ハ新よ詞にて、波の花ならバ包てもてゆかんものをと
いふ也、つとハ苞苴をいひて、物を包てもてゆくに、浦山の物を包て人
に贈る也、しかるにかくあるよしをいへると将して包もたるものをと
よめりといふ事となれり、又書紀に出て演て猶のつとゝいふも同じよみ

博通法師往紀伊国見三穂石室作歌三首　博通伝しれず

皮為酢寸久米能若子我伊座家畄一云家牟三穂乃石室者雖
見不飽鴨一云安禮尓家畄可毛

はだすゝきくめのわくごがいましけるみほのいはやはあれにけるかも

はだすゝきハ枕詞、顕宗紀弘計天皇更名来目稚子とあり、又億計天皇
弘計天皇ハ難を避て丹波に行給ひ、後臣余社郡使主播磨国縮
見山の石室に入て自経死しける事、かくれバみとし播磨の国なりし、
縮見石室に籠れたまひしかバ、それを紀伊の国にいひ傳へてかくよめる
にや、紀にみえて石室に住よせしといふべけれども、播磨にて縮見
せし事あれバ、紀にみえし事におもひし事にやあれども、弘計天皇
の御事をかくいひなしけるよし、久米の若子ハ久米部の親
なりて、石室の住ける事ありねるハ次の歌にても知べし

常磐成石室者今毛安里家禮騰住家類人曽常無里家畄

ときはなるいはやはいまもありけれどすみけるひとぞつねなかりける

常五等伎波奈周かくしもがもと云れバ、ときはなすよとしもいへれどもハ

石とつゞけたればなくらし訓べし、住たる人ハ久米のことぞとよ

石室戸爾立在松樹汝乎見者昔人乎相見如之

いはやどにたてるまつのきなをみればむかしのひとをあひみるごとし

いはやどハ石室の門也、汝ハ松をさしていへり、住る人ハ久米のことゞをいふ

門部王詠東市之樹作歌一首　一本に旧本曰後賜姓大原真人

敏達天皇六代孫舒明天皇之後也と注せり、此舒明天皇の四字ハ

衍字なるべし、続紀和銅六年正月无位門部王に従五位下を授

とあるくいてそれよりくだりしの事跡を略して、天平三年従四位上とせり、

作の字衍文なり

東市之殖木乃木足左右不相久美宇倍吾恋爾家利

ひんがしのいちのうゑきのこだるまであはでひさしみうべこひにけり

市ハ京西ニ有、東ハ左京七ニ西の市ハ右京にあり、雄略紀餌

香市遷橋といひしハ二ニ橋の後ちむろのでもちゐてよめる歌なく、木の

の大路に菓樹を植られしを、木だるハ老木となりぬれバ枝垂るゝよりのをいへれバ

いふ、此ナヤかまくら山の神木流木字とかよめり、婦とふしくあるんぬ

さいちんよとてくらぶべハ諾(ウベナフ)ニ、宣ハ信の下吾の字古本にあり、経に入るゝ

あはそたる注に内匠寮大属とあり、此桜の字鞍の省文なるべし

桉作村主益人(クラツクリノスクリマスヒト)従豊前国上京時作歌一首　此ハ古本に同人の歌

梓弓引豊国之鏡山不見久有者恋敷牟鴨

あづさゆみひきとよくにのかゞみやまみずてひさならばこひしからんかも

あづさゆみ枕詞、引をそれとは身をはしいへるへ、弟子考にくはし

鏡山下の郡にありて止めしあそ、こひしからんハ恋しからんと云、おもに

同まで許をいへるいひつけたり

式部卿藤原宇合(ウマカヒ)卿被使改造難波堵之時作歌一首

続紀天平九年八月参議式部卿兼太宰帥正三位藤原朝臣宇合薨太政大臣不比等第三子也とあれバ、さて馬養とかきし宇合とかきし同じ人なるを紀とかく知べし、されバ宇合をうまかひと訓べき也
神亀三年十月以知造難波宮事を任て、天平四年三月以事終ぬこさ乃のすく、堵ハ都とおしたまへし契沖いつまも

昔者社難波居中跡所言奚米今者京引都□備仁鶏里

むかしこそなにはゐなかといはれけめ、いまハみやことそなはりにけり
難波ハ仁徳天皇ハ高津宮、孝徳天皇ハ長柄宮をまうけて宮を大宮造まして帝都の地なれど、久しく都をうつされて居中といはれつるを、居中ハ田居中の義也、今年都ハつのみやこに例ちひかなりまさりも稀あらじを、都の字の下一字闕てうたんゆるよりて、指諸成ハ引ハ師の倍、於ハ乃の誤なるべしさて乗の字落しつ、さらバ今者京師跡乗備仁鶏里ハいまハみやことにぎはひそなはりにけりとよむべしといへり、契沖ハいまハみやこびきみやこびなかしよめるを、於びなかハさらなべし、みやこびさとハ詞つかなし、其謂ニ引ハ身ニ刀の誤なるべし、いまハみやことそなはりにけりとよむべし

土理(トリ)宣令(ノセンリヤウ)歌一首　続紀養老五年正月刀利宣令ニ詔して東宮に侍らしむるよしあり

見吉野之瀧乃白浪雖不知語之告者古所念

みよしのゝたきのしらなみしらねどもかたりしつげばむかしおもほゆ

其一よをさへのよしとかへてよもいひしともいふせ給ひ其七古のかごとき人の遊びんなどいひて此山ハむかしより名高かるをすぐれたるもののあればなり

よみつ、告ハ借字なるく続なるも

波多(ハタノ)朝臣少足(ヲタリ)歌一首　紀ニ波多氏ハ見ゆれどもサ足といふハ見えず

小浪礒越道有能登湍河音之清左多藝通瀬毎爾

さゞれなみいそこせぢなるのとせのおとのさやけさたぎつせごとに

大和なる高市郡巨勢之ハ、さゞれ浪いそこすといひかけたるなり。集中

能登湍川をかくしたる川といひかけたる歌あり。巻十二許湍(コセ)

なるのとせの川とよめる也

暮春之月幸芳野離宮時中納言大伴卿奉勅作歌一首

并短歌　未逕奏上歌　逕ハ經の俗字。これハもとよりの自注なるべし。

續紀神亀元年三月吉野宮に幸さる。大伴卿ハ旅人なり。養老二年中納

言に任らる

見吉野之芳野乃宮者山可良志貴有師永可良思

みよしぬのよしぬのみやはやまからしたふとくあるらしかはからし

清有師天地與長久萬代爾不改

さやけくあるらしあめつちとながくひさしくよろづよにかはらず

將有行幸之宮

あらむいでましのみや

言もかはらずむかしの事をいふ也。山からし、水からしのからハながらの意、

しハ助辭、永ハ水の誤なるべき事、契沖がいへるがよし。されどみづとし

訓るハいまだし。天地とながく久しくハ、神代紀宝祚之隆當与天壌無窮

者矣とあるに同じ。離宮をいでましのみやといへる例ハ

從ひてよむのみ

反歌

昔見之象乃小河乎今見者彌清成爾来鴨

むかしみしきさのをがはをいまみればいよゝさやけくなりにけるかも

此很同じ京なりたるゆゑ久しくてこの度見られければかくハよまれ

よみかへしんばりきしたる事ゆゑよりて出たるものを河をとくよみたる

山部宿禰赤人望不盡山歌一首并短歌 山の下作の字のとゝ拠へ

せられし山部氏ハ古事記山部大楯連山部小楯ありてかくハかばねハすく連

なるを宿禰ハ後に賜れるなり赤人ハ此集の外あらハれず舎人などやありけ

るん事の傳なくて詳ならずかきよみしうたハ後東国にかけしハ国司

まてハあらず班田使などの時なるべし

天地之。今時従。　神左備而。　高貴寸。　駿河有。

あめつちのわかれしときゆかんさびてたかくたふときするがなる。

布士能高嶺乎。天原。　振放見者。　度日之。陰毛　隠

ふじのたかねを。あまのはらふりさけみれば。わたるひのかげもかくろ

比。照月乃。光毛　不見。　白雲母。伊去波代加利。時自久曾。

ひ。てるつきのひかりもみえず。しらくもゝいゆきはゞかり。ときじくぞ。

雪者落家留。語告。　言繼将往。不盡能高嶺者

ゆきはふりける。かたりつぎ。いひつぎゆかん。ふじのたかねハ

振放のふりハ詞なりハ遠くわたきみる也かくろひハかくろひとゆふにとぞいひ

ぞうのいハ発語。はゞかりしげしハ山をこえがたくてこゝにとゞまる也

時じくハ代ハ代の語にて時ならぬなどいふ也ときじくハ時ならず也

言つぎゆかんハ末の世まで語りつぎいひつぎゆかんと也告ハ借字

ゆく継之告を継に借る例も、かたりつぎのことなるハむかしよりのことぞ

反歌

田兒之浦従。打出而見者。真白衣。不盡能高嶺爾。雪者零家留

たごのうらゆ。うちでゝみれば。ましろにぞ。ふじのたかねに。ゆきはふりける

駿河の盧原郡の浦なり東へ行ば今の薩埵坂といふ山の下の渚

立ヲ之ニ伐ヲ代ニ誤

みちの道すて、そこより又向ひの伊豆の山の麓までの海田子の浦く
大の岸崖の名をも東へゆかれば、人海越しふみ見ゆるとおもふ人ハ
田子の浦より東へうち出てみれば、ふじを見るのくハよあるを、ゆハ
よりうしろの詞ありてハいとかろくきこゆべし、何にかなれどもくとく
もとおぼゆ

詠不盡山歌一首并短歌

奈麻余美乃甲斐乃国打縁流駿河能国與己知其智乃
なまよみのかひのくにうちよするするがのくにとこちごちの
国之三中従出立有不盡能高嶺者天雲毛伊去波伐加利
くにのみなかゆいでたてるふじのたかねはあまくももいゆきはゞかり
飛鳥母翔毛不上燎火乎雪以滅落雪乎
とぶとりもとびものぼらずもゆるひをゆきもてけちふるゆきを
火用消通都言不得名不知霊母座神香聞
ひもてけちつゝいひもえずなづけもしらずあやしくもいますかみかも
石花海跡名付而有毛彼山之堤有海曽不盡河跡人
せのうみとなづけてあるもそのやまのつゝめるうみぞふじかはとひと
乃渡毛其山之水乃當烏日本之山跡国乃
のわたるもそのやまのみづのたぎちぞひのもとのやまとのくにの
鎮十方座神可聞寶十方成有山可聞駿河有不盡能
しづめともいますかみかもたからともなれるやまかもするがなるふじの
高峯者雖見不飽香聞
たかねはみれどあかぬかも

なまよみのうちよする枕詞、こちごちハ彼方(ヲチカタ)此方(コナタ)之といふ事にて、あちらこちらと云ふ
国のみなかハ真中、出立とハ出之とあるハ誤也、古写本に依て

故つくばねのねは嶺の義にて、みねといへり。こはせつや
いまもしかも〳〵は若此山を神といへり。せの海とは鳴沢のごとく、三代実録
貞観六年五月富士焼て大山西北木栖水海埋しるよし、同七年十二
月剗(セノ)海を埋る千許町とあり。日本紀畧承平七年十一月甲斐国言、
駿河国富士山神火水海を埋とあれば、此時に絶たるなるべし。又石花
とかけるは、和名抄崔禹錫食経云、石花(カメノテ)蹄子 和名勢 云々、兼名苑注云、石
花二三月皆紫花附石而生、故以名之とあれば、世のかめのて也
となむ山より常あまりて回りくだるの五一里計の間なり、つかに山の
つめるといへり。又見沈とす海といへる説もいへり。水乃常の下知の字
落しの鳥とぞのこる見ひとるは如まてあれど、ぞとよむべきなりし、
あるは写の字の誤まるなるん。日本をひのもとよみてある、古くは大和、続
日本紀に日本の億の字を寄て日本(ヒノモト)の国とよみべし、此等く

のたまへるは祝詞に、日の少宮の儀と云ふ言をと字を挙て論へり、
しづめとも八字をいへるに、顕宗紀室寿に築立柱者(ツキタツルハシラハ)此家(コノイヘ)
長御心之鎮也(ヨナガミコヽロノシヅマリ)といへり、なほ出でたるもあまたなり、そは之興
ぞしてこのみしてなほ猶をしてよくるしきる難人のよみけるなり

反歌

不盡嶺爾零置雪者六月十五日消者其夜布里家利

ふじのねにふりおけるゆきはみなづきのもちにけぬればそのよふりけり

かゝる説のことを云て人の説ぞんまくふよあるなるべし、さらでもとてよく此
山より外へては六月もみな月とは云ぬき二月の名の考は考の九の説の義

布士能嶺乎高見恐見天雲毛伊去羽計田菜引物緒

ふじのねをたかみかしこみあまぐもゝいゆきはゞかりたなびくものを

そて山のたかればはやぞてるびけはくいへり、そのことのとはよふかかひて

此等のたぐひは集中かゝる例多し

右一首高橋連蟲麻呂之歌中出焉以類載此 等の字下

集の字後ちに大の字ありかゝるみの等ゞらの字書き座なる集ヘ

まうしたもち等とも等ハ書座をよめるなぞ

山部宿禰赤人至伊豫温泉作歌一首并短歌 天武紀十三

年十月己卯朔壬辰大地震云々とありて伊豫湯泉没て不出とあり

此歌の頃ハ程ちかへの事なれバ赤人のうたにかけるのさらふふるしきなるべし

皇祖（すめろぎの）神之神乃御言乃敷座 国之盡 湯者霜

かみろぎのかみのみことのしきませるくにのことごくゆはしも

左波爾雖在 島山之宜 国跡 極此疑伊豫能高嶺乃

さはにあれどしまやまのよろしきくにとこゞしかもいよのたかね

射狭庭乃 崗爾立之而 歌思 辭思為師 三湯之上乃

いさにはのをかにたゝしてうたおもひことおもひせしみゆのうへの

樹村乎見者 臣木毛 生繼爾家里 鳴鳥之 音毛

こむらをみればおみのきもおひつぎにけりなくとりのこゑも

不更 遐代爾 神左備 将往 行幸處

かはらずとほきよにかんさびゆかむいでましどころ

かみろぎハ祝詞神賀詞などに出て皇統の祖をいふ又おくの諸代を

もさせり、巻十九皇祖乃遠御代ミハともよめるも前くの天皇をさ

すなれども宮もは程旧例のまゝにすめろぎとよまんといへり、こゝ

しハあをむかうハ出る根の詞を思いなり、かもハ歎いさにはハ郡名并

伊与温泉郡伊佐尒波神社あるそこなるべし、岡に立して云々ハ

よまかみろぎとやせしハ既に云ゝく上古の天皇をとほくいふしと

いへるハ近くの天皇をやなるへし舒明紀十一年十二月伊与温湯宮

み幸のことハ、伊豫風土記を引て、湯郡天皇等於湯幸行降
坐五度也、景行天皇以大帯日子与八坂入姫命二躯為一度也、仲哀
天皇以大帯日子天皇与大后息長足姫命二躯為一度、以上宮聖
徳皇子為一度、及高麗恵慈僧葛城王等也、立湯岡側碑文處
謂伊社尓波者、當土諸人等其碑文欲見而伊社那比来、因謂伊社
尓波也、以岡本天皇并皇后二躯為一度、于時於大殿戸有樹木、云臣
木、其上集鵤比米、天皇為此鳥繋稲穂養賜也、以後岡本天皇近江
大津宮御宇天皇清御原宮御宇天皇三躯為一度、此謂行幸五
度也とあり、巻一數襄歌林を引る所ニ、一書云是時宮前有二
樹木、此之二樹斑鳩此米二鳥大集、時勅多掛稲穂而養之、乃作歌云々
とあるハ、此時のさまぐ〳〵の中ニ、先ようておま幸ありしなどのみを、古本
につけていへれ、或ハ碑ニも書しあるまゝをみて、そのまゝをとりしらひ碑志あひせし

とハいつはるべし、思と志あひしハ集中ニ多くよめることなり、去年一調於河内之
のさまのみ思而為(シヒテ)れおしとみえず、志あひてよめるなかりしぞ、寛集ニ
ことハ其おもひ辞(コト)もあはしくおもく上宮太子の事を思ひめぐらし、文をおもひ
めぐらしおもひしといへるも、文ハ風土記ニのせたる碑文をいへり、稲ぞべしことなり
らハ木群之、和名抄ニ纂要云木枝相交下陰曰樾、和名古無良とありて、
ハ語の字をおしあてたるものぞ、此ハ其湯ぞ、おほみの木ハ人ニいみじみの
本之、神武紀孔舎衛(クサヱ)の戦人大樹ニ隠れて難を免かるゝに、樹の恩母
のごとしとて、時人其地を母木邑といひ、今云飫悶廼奇(オモノキ)といふハ訛れるなりし
天ゆへ、とおきよりきたよるハ昔をいひ、中ニ今をいひ、下ニまたの世ともろかて
いへるなるべし

反歌、

百式紀乃大宮人之飽田津爾船乗将為年之不知久

かしこきのおほみやびとの、ほこらかにふるまはれのきこしめんとしのこゝろなるべく
鉋ハ鐃の誤なるべし、みぎこゝハ伊与氏説もおなじく云人も彼のさまなく
しれるなるべし、鐃ハ鐃田ともいふ説も、鐃田ともいふ説もなきといへど、新考べし、
あるへもあら至武の古訓とみゆれば、是か、さもありなむ八つぎの詠作とも来ぬ、
それより去きなく此書ありなれば事の数もこゝにしるしぬとかく

登神岳山部宿禰赤人作歌一首并短歌

三諸乃神名備山爾五百枝刺。繁生有都賀乃樹乃彌
みもろのかみなびやまにいほえさししじにおひたるつがのきのいや
繼嗣爾玉葛。絶事無。在管裳。不止将通明日
つぎつぎにたまかづらたゆることなくありつゝもやまずかよはんあす
香能舊京師者山高三。河登保志呂之。春日者山四
かのふるきみやこはやまたかみかはとほしろしはるのひはやまし

見容之。秋夜者。河四清之。旦雲二。多頭羽亂。夕
みがほしあきのよはかはしさやけしあさぐもにたづはみだれゆふ
霧丹。河津者騒。毎見。哭耳所泣。古思者
ぎりにかはづはさわぐみるごとにねのみしなかゆいにしへおもへば
みもろのことあるむ、つがの木の、むつび枕詞、まつもいなあへて、ある
うのたまむ都ハ飛鳥河原宮にあれども、まへまで浄御原宮又ところ
ろうつりしハ岸がふかなしん、とも又ハいちじろくあまやうふかんゆるをといひて神
代紀の大小魚の三字をとうりろくさきいひし、川にハ又すくしく聴きたなるべし、
みがほしハ目のれをりめまほし、さやぐハ蛙の鳴きさわぐをいふ、所泣ハねを
十五丁祢能未之奈加由(ネノミシナカユ)とあれば、しかなるゆゑよめり、帝都のありし時
の盛なりしを思ひ出て、ねなくといひて、赤人ハ明日香くさかれ
人なるべくれバ、あのくしきのさまをつけてあはれをそへしなるべし

反歌

明日香河川余藤不去立霧乃念應過孤悲爾不有国

あすかがはかはよどさらずたつきりのおもひすぐべきこひにあらなくに

あすかがはをやがて序とせり。古郷の川よどをはなれぬごとく古京を忘れ
のがれのやうもなきこゝろなり

門部王在難波見漁火燭光作歌一首　続紀和銅三年正月
無位門部王に従五位上を授く後に大原真人の姓を賜りし人也

見渡者明石之浦爾燒火乃保爾曽出流妹爾戀久

みわたせばあかしのうらにともすひのほにぞいでぬるいもにこふらく

みわたせばハ見やるといふ意。十五いきりたる安麻能等毛之備、巻十
九にもいさり火の燭者ハいさり火のともしびなれバ、ともしびの火をいふなるべし。ほにいづると
のあらはれ出るといふ意。上ハいさり火とみえくやがて妹をこひしきと序とし

して妹をおもふこゝろのあらはれたるといふにて、是ハおもひのあらはれと読ふ
よくしらるゝ也。ことばにてしるし

或娘子等賜裹乾鰒戲請通觀僧之咒願時通觀作歌一
首
目録に或娘子等以裹乾鰒贈通觀僧戯請咒願ことありこれ
よるべし。通観ハ伝しれず

海若之奥爾持行而雖放宇禮牟曽此之將死還生

わたつみのおきにもちゆきてはなつともうれむぞこれがよみがへらまし

海若とそれども、うれむぞハ何ぞといふにて、うれむぞハ何ぞといふとすることなり。
もとをへバいづれもなどといふ意也。巻十一に平山の子松が末の有廉
叙波ことの兄妹にあひてやみなむといへるうれむぞに同じ。こゝに
あまのたくといへるによみがへりなんハ黄泉よりかへるといふ
ことにて、よそのへるといふ也。死たるものを呪にてよみがへらするといへるなり

ならなるよりわざびとをうくる事を呪と情しなるべし

大宰少貳小野老朝臣歌一首　續紀天平九年六月太宰大貳従四位下にて卒せり

青丹吉寧樂乃京師者咲花乃薫如今盛有

あをによしならのみやこはさくはなのにほふがごとくいまさかりなり

あをによしは枕詞、下に薗花香君之しろしめすこと訓、又十六巻にも〓ほとゝ〓の將〓〓時とあるも〓ほふとよむべければ、こゝも薫をにほふとよむべし。此の歌ハ〓〓〓〓〓なることを知べし。元明天皇の此時都をうつされしより、〓〓年ばかりをへたるほどなればよみしなるべし

防人司佑大伴四綱歌二首　防人ハ太宰府の屬官にて軍防令に守邊者名防人、さて大伴の下に宿禰の字脱たり。四綱を綱目訓に綱と作れど

安見知之吾王乃敷座在国中者京師所念

やすみしゝわがおほきみのしきませるくにのなかにはみやこしおもほゆ

大嬉の句に四方之国中登とあるを、神武紀の国之墺區といへるとの訓にてよめり。〓〓もの〓〓のまほらと翁のよまれしかば、こゝも志か訓べけれど、猶此訓のまゝならむにも従ひつ

藤浪之花者盛爾成来平城京乎御念八君

ふぢなみのはなはさかりになりにけりならのみやこをおもほすやきみ

ふぢ浪ハ花ぶさ靡くよりなづくるとかてふぢなみといへり。此歌より下三首は旅人とよみ、佑なれバ帥をさして云ふべし。帥ハ大宰帥の旅人の事なり。利作の大伴〓人の事を彼作保の山をバなほしてやよミつらむ。よみて帥奉りしことなり

帥大伴卿歌五首　旅人なり

吾盛復將變八方殆寧樂京師乎不見歟將成

わが命のまくあらばちゝめやはとしておなじくのみやことにみやこにかへらまほしみ
此二の句まさかへりわかやしとよみて八調ひくるし宮ちゝ来立わのさかりけるを
くらぶらぬやしうるは素をむかへても遠知あやしく人やしきるは素えむ
よくハ初見んバいやしきわの首まで越知めべしとあらはれ神へ返るてすを
変若といへるハうるはしきびのをちのへ返るなどし此新くされバ
今もをちへやしとよむべしほめしハ遍りのことまでこそハ変若の
初をゆるぬよ近きをえといへる人まのさハ是れ又若きまこゝろべきよする
なれバ老身に老来くなるの初をえたるのあらじとく

五百命毛常有奴可昔見之象小河乎行見為

わがいのちもつねにあらぬかむかしみしきさのをがはをゆきてみんため
あらぬかハあれかしよ新古今ハいつまでも集中ままし象のをがハ
吉野にあり

浅茅原曲曲二物念者故郷之所念可聞

あさぢはらつばらつばらにものもへばふりにしさとのおもほゆるかも
あさぢはら枕詞つばらハつまびらかの略つのかみのふりにし山のふるさ
とし里といふハいつかしの山のふるさとにてのおもほえたるべし

萱草吾紐二付香具山乃故去之里乎不忘之為

わすれぐさわがひもにつくかぐやまのふりにしさとをわすれぬがため
和名抄兼名苑云萱草一名忘憂漢語抄 和須礼久佐 とも云く云々
花さく草なり是を身に帯れば憂をわすれ〓の志こそ
うなりとよみにまれぬがためハ忘れんとの
わすれぬためにハいかにしてわすれんが為にといふことなり

吾行者久者不有夢乃和太湍者不成而淵有毛

わがゆきハひさにハあらじいめのわだせにハならずてふちにあるかも

日本政府図書

半七ヨ芳野作とゝく蓋のわざとよみハ懐風藻ヨ吉田連宜従駕吉
野宮詩ヨ1夢淵と作ぞられバ象河のあるあたりなるべく、和歌ハ山べ
の滝まて闇とされバかならずおなじといふべきよしちかられの説を
見よ。をて本ちんといひ、そまて論じんも久しからあるべくそとありし闇も
かならずわらんなどいへるハ遠き場より見てハさもみしまおもひつるまず
これおなれはいひてなくれしるく、毛ハ義の謬りと翁ハいましめ給ひき、宣長ハ
有の千世の事を疑ひせるハふちあれやもあく聞まくあれとて
ちえいつでも

国立公文書館
National Archives of Japan